



rain 5



短編小説



greentea0117



八百屋

あるところに八百屋さんがありました。八百屋と言っても小さな八百屋さんです。店には商品がところせましと並べられています。八百屋さんの横には洋服屋さんがあり、洋服屋さんの横にはお惣菜屋さんがありました。三軒の店は肩を寄せ合うようにしてたっていました。

八百屋さんの野菜は他の店より安く、たくさんの方が買いに来ました。

「こんなに安くて儲けはでるんですか」

お客さんが聞くと、

「ぼちぼちですなあ」

八百屋さんは頭をかきかき言いました。あんまり儲かってはいなかったのですが、とにもかくにも店を続けることはできました。

お惣菜屋さんはいつも八百屋さんから野菜を仕入れていました。その日その日の安くて新鮮な野菜を買い、安い惣菜を作ります。だからメニューはその日によって少しずつ違うのですが、結構人気の店でした。貧乏な学生や疲れたサラリーマンがやってきてはその日のおかずを買いました。そういうわけで八百屋さんとお惣菜さんはなんとか商売をしていました。困っていたのは洋服屋さんです。

洋服屋さんの店主のおばさんは、洋服屋なのに、洋服のセンスが全くありません。キラキラのパンコールが縫い付けられたブラウスや、ゾウの絵がでかでかと描かれたTシャツなどを仕入れていましたが、ずっと店にぶらさがったままでした。このままでは店が潰れてしまう、おばさんは思いました。でもどうすればいいのかさっぱりわかりません。

おばさんがやってきたとき、惣菜屋さんは残り物の惣菜で遅い食事をとっていました。驚いて戸を開けると、

「はあ」

おばさんはため息をつきました。

「長い間世話になったけど、いよいよ店をたたむしかないようだ」

おばさんは開口一番嘆きました。惣菜屋さんは驚いて、

「急に何を言い出すんだ」

と言いましたが、

「前々から考えてたことですよ」

おばさんは心底疲れた様子で言いました。

「ばかばかしい」

惣菜屋さんは言いました。

「まだ何も工夫してないじゃないか」

「工夫？ でも私は洋服のセンスも何もあったもんじゃない。そもそも洋服屋をやっているのが間違いなんだ」

と聞く耳を持ちません。惣菜屋さんはこれはいけないと思い、

「まあまあ」

と言って、おばさんをなだめました。

「夜だからそんなに思い詰めてしまうんだよ。何か案を練ればいい」

と言って、八百屋さんと呼びに行きました。八百屋さんはその日の売り上げを帳簿につけるのに眉を寄せ、ペンで頭をがりがり搔いていました。

「やあおつかれさん」

惣菜屋さんは言いました。

「ああどうも。明日の仕入れなんだけど……」

「それより困ったことになったよ」

惣菜屋さんは言いました。

「洋服屋のおばさんが店をたたむと言いだしたんだ。いまうちにいるからちょっと来てくれんかな」

八百屋さんはぎょっとして立ち上がりました。

「店をたたむってどうしてそんな急に」

八百屋さんはよっころしょっと惣菜屋さんの居間に座りました。惣菜屋さんは残った惣菜を全部皿に盛りテーブルに並べます。

「だってちっともお客さんは来てくれないし」

洋服屋さんのおばさんはぐずぐずと泣いて服の袖で目をぬぐいました。

「そりゃそうだが、今に始まったことじゃないだろう」

八百屋さんは言い、惣菜屋さんに肘でつつかれました。

「あんたんとこの洋服は高いんだよ。もうちょっと安くならんのかい」

八百屋さんはこれでもことばを選んだつもりです。

「仕入先が決まってるもの、ずっと昔から」

「それだよ、それ。思い切って変えたらいいじゃないか」

「でもねえ」

「店がなくなるよりいいだろう」

八百屋さんのきっぱりした意見により、洋服屋さんは仕入先を見直すことにしました。

八百屋さんは店先に立ち、野菜を並べながら、

「困ったもんだ」

と呟きました。洋服屋さんの洋服が売れないのは、八百屋さんが見てもわかります。でもじゃあどうすればいいかという考えは、いっこうに浮かびません。

「八百屋さん、景気、悪いのかい」

お客さんが聞きました。

「やあ景気はいつもどおりだけどさ。ちょっとね」

「八百屋さんにも商売以外の悩みってのがあんだねえ」

お客さんはトマトを選びながら言いました。商売といえば商売だが、自分のところ以外の商売となると勝手がちがっていけない、八百屋さんが思っていると、

「今日のきゅうりはいつもにもまして曲がってるねえ」

お客さんはわははと笑いました。

洋服屋さんは思い切ってしばらく店を閉めることにしました。いろいろな仕入先を回って見ましたが、いったいどこがいいのか、そもそもお店をどうしたいのか、さっぱりわからなくなったのです。お店のドアには、『しばらくお店をお休みにし、リニューアルします。どうぞ期待!』と書いた紙を貼ったものの、なにをどうしたらリニューアルになるのでしょうか。八百屋さんや惣菜さんは心配して様子を見に来てくれます。八百屋さんはぐずぐずせず、とにかく前進あるのみと言います。惣菜屋さんは何をどうやっていいのかわからず、おろおろと残り物の惣菜をテーブルに並べます。

「とにかく安さだと思うよ。わたしが商売で知ってることといえば、なるべく安く、ということぐらいだよ」

八百屋さんは言いました。

「でも安くって言ったって、今は安い店がいくらでもあるのよ」

洋服屋さんは言います。

「じゃあそれよりも安く売るんだ」

「まあまあ。うちの惣菜は冷めてもおいしいけどね。そろそろ食べないと」

惣菜屋さんは言いました。

洋服屋さんは知恵をしぼり、洋服を安く仕入れる方法を考えました。そして昔からのつてをたどり、売れ残って返品された服を安く仕入れることにしました。洋服屋さんに並ぶ服はがらりと変わりました。値段もがらりと変わりました。ようやくシャッターが開いた洋服屋さんの前を通りがかった人たちはぎょっとしました。きらきらとしたやけに豪華な洋服たちはなりをひそめ、カジュアルで安い服が所狭しとぶらさがっています。ただ安いといっても本当に破格の安さです。

「おばさんいったいどうしちゃったの？」

通りがかった人たちはおっかなびっくり店に入ってきました。ちょっとひやかすつもりだけだったのに、あまりにも安いので、一つ二つ買っていきます。そういうわけ洋服屋さんは八百屋さんや惣菜屋さんに負けないくらいの繁盛店になりました。

「はあやれやれ」

八百屋さんは店奥のレジに座り、珍しくぼうっとしていました。ちょうど夕暮れ時、惣菜屋さんにはひっきりなしにお客さんが来ています。

「おばさん、こんなに安くて儲けはあるの」

洋服屋さんにはいまでは老若男女、いろんな人がやってきます。

「まあぼちぼちでんな」

おばさんは言いました。